



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	資源空間の変容をめぐる人びとの抵抗と順応 : 沖縄の事例から [全文の要約]
Author(s)	高崎, 優子
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13417号
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/74358
Type	doctoral thesis
File Information	Yuko_Takasaki_summary.pdf



学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 高崎優子

学位論文題名

資源空間の変容をめぐる人びとの抵抗と順応

—— 沖縄の事例から ——

本論文は、沖縄の複数の地域社会を事例として、人びとが経験してきた資源空間の変容と、それに対する彼らの対応—抵抗と順応—とを、環境社会学的に論じようとするものである。

日本列島の南西端に位置し、琉球弧と呼ばれる島嶼群のひとつを占める沖縄は、近年 100 年の間にさまざまな社会変動・環境変動を経験してきた。かつて一つの王国をなしたその場所は、1879 年に日本に組み込まれて後の 1945 年には太平洋戦争の戦場となり、焦土と化して以後は米軍の占領下に置かれ、1972 年にふたたび日本に組み込まれた。以来、手狭な土地の多くが米軍基地として占有され、本土並みの経済発展という掛け声のもとにさまざまな開発が行われ、翡翠色の海が埋め立てられてきた。しかし開発は全て外圧的に行われたわけではなく、生活の利便性を希求する人びとの願いの実現という側面も確かにあった。一方、人びとは自らを取り巻く自然にさまざまな文化的・精神的・物質的価値を見出しつつ、その〈生〉—本論文ではこれを、根源的な単数性に支えられた、代替不可能な存在としての個々の〈生〉そのものと捉える—を営んできた。沖縄社会においては、豊かで脆弱な亜熱帯生態系の在りよう、人びとの〈生〉の在りようとは、互いに深く切り結び合いながら存在している。

本論文では、こうした沖縄の複数の地域社会を舞台として、変動のなかで編まれ続ける人と自然との関係を描いていく。具体的には、今帰仁村古宇利島、国頭村安田集落、うるま市浜比嘉島という 3 つの地域を事例として、それぞれの地域が抱える個別具体的な問題を、今日「環境保全」や「自然資源管理」と呼ばれる問題群に接続しながら、歴史的記述を積み重ねていく。そして、人びとと自然環境の関係の総体がどう変動してきたのか、その中で地域住民たちがどのような対応をしてきたのか、について考察、分析する。フィールドに接近し、個別の問題を一つ一つ解きほぐしながら、地域社会のあるべき姿、人と自然の関係のあるべき姿について考察を重ね、最終的には人びとの〈生〉を踏まえた人と生

態系のこれからを考えようとするのが、この論文の目的である。

本論文ではこの目的を達成するために、延べ 330 日間にわたるフィールドワークから得られた参与観察の記録、聞き取りデータの記録、写真、映像、地図などの詳細な一次資料と、市町村史、字誌、議会議事録、関係機関資料、裁判記録、日・米公文書、新聞記事、書籍、論文、報告などの文献、史資料を網羅的に利用した。

本論文は全 7 章からなる。第 1 章では、本論文の目的と方法を述べた。環境社会学における資源管理やコモンズの議論を批判的に振り返りながら、地域社会を舞台として人びとの〈生〉に分け入って記述するには、その社会を構成する人びとの複数性に注目する必要があることを議論した。また、資源空間の変容を受けて、そこで営まれる個別具体的な〈生〉が抱える問題と、「環境保全」や「自然資源管理」といった問題群を接続するための出発点として、「主体」の問題を設置した。なぜなら、今日グローバルイシューとなった「資源管理」や「環境保全」という問題において、それが論じられ実践される公共空間に、当該生態系に抛って立つ人びとが「現れ(appearance)」ることができない、そのことが、両者を接続して考える際の妨げの最たるものだからである。「現れ」とは知られているようにアレントの用語である。

第 2 章では、序章の議論を受けて、「主体」の問題を取り上げた。事例としたのは沖縄県今帰仁村・古宇利島の漁業資源（ウニ）管理である。具体的には、地域社会が管理主体として不合理であった場合に、それでも彼らが自然資源管理の主体であるべき理由は何か、という問いを立てた。なぜなら、彼らは意図的な管理の失敗も含んだ資源管理を行っているからである。事例から明らかになったのは、人びとが人、あるいは生態系そのものと交渉を重ねながら、個々のありようを損ねることなく資源管理の妥協点を見出している、ということだった。資源管理という営為は、自然と人との絶え間ない交渉のプロセスであり、また、人と人との絶え間ない交渉のプロセスである。であるからこそ順応的なのである。

一見不合理ともとれる管理の失敗の許容は、生活主体として生きる人びとの複数性からもたらされる、互いの差異の承認を受けてのことだった。さらに、資源との多様なかわりとりと、そこから生成される資源をめぐる輻輳的なコンテクストの存在が、紆余曲折を含む資源管理のなかで、決定的な資源との決裂を防ぎ、資源管理の弾力性を支えていた。こうした分析から、個々人の差異の承認に基づく資源管理を行えるのは、その空間に生きる彼ら自身に他ならないことが、地域社会が資源管理の主体であるべき理由であると論じた。

第 3 章と第 4 章は、「貴重な自然」への評価が高まるヤンバルに舞台を移し、そうした評価軸の変化が地域社会にどのような問題を引き起こすかについて考察・分析した。事例地としたのは、国頭村^{あだ}安田集落である。第 3 章では、「山稼ぎ」という生業を中心として人びとが山を資源空間として成立させてきた様子を、王府時代から近代への移行、戦前から戦

後への移行、現代、と順に詳細に記述し、地域社会にとっての山の意味、そして山にかかわる地域社会のしくみの変化について考察した。住民たちの巧みな植物利用、林産物利用についてリスト化し、さらに、集落の議事録を用いて、さまざまな山の管理・運営の仕組みについても明らかにした。

山を資源空間として成立させる過程では、制度の変容に応じて登場した権力作用（ヤンビシャと呼ばれた国有林の監視役人）に対する巧みな交渉や、山からの富を分配する「協同売店」という装置の存在などがあった。ヤンビシャとの間には、〈顔〉のある関係から生じる、制度からの逸脱もあった。戦後はとくに、「協同売店」と山稼ぎの仕組みとを組み合わせることで、戦禍からの復興を果たし、山からの恩恵という念が人びとに深く刻み込まれた。また、資源空間として成立させるための植物の知識、伐採、造林といった身体的な経験があり、人びとは時代の変化に応じて過伐から保護の間をたえず揺れ動いてもきた。そうした複合的な営為の積み重ねが、「安田の山」をつくり、「山稼ぎ」という生業を成立させてきた。この 100 年近くのあいだをふり返ってみれば、貨幣経済や法的所有権といった典型的な「近代」が登場し、また、「戦争」があった。王府から日本、日本からアメリカ、アメリカから日本、というように、施政権も揺れ動いた。空間を規定するルールや枠組みが絶えず変容し、そのたびに人びとはうまく順応してきた、とも言える。

だが、次第に山が資源価値を失い、人びとと山との関係が薄れていくなかで、山は生態学的・生物学的に極めて価値のある「貴重な自然」へと変化していく。そのような変化のなかで、さきにみた複合的な人びとのいとなみへの評価は、生態系への人為的影響の是非という問題へと転じていった。「貴重な自然」という文脈は、語りの全体性を強力にフィルタリングする作用を持つからである。そうして現在では、「貴重な自然」というフィルタによって、人びとと山とのかかわりの全体性が解体され、聞かれることなく、人びとの記憶は次第に社会のなかに埋没していった。そのことが次章でみる問題に影響を及ぼしている、と論じた。

第 4 章では、同集落において、山が資源空間として成立しなくなったのちに登場したヤンバルクイナという希少種をめぐる人びとの揺れ動きと、その資源化をめぐるさまざまなコンフリクトを記述、分析した。1981 年のヤンバルクイナの「発見」以降、クイナ保護の動きが外部からやってくる。安田はその動きに敏感に反応し、集落独自の「ネコ条例」を即座に制定するなど、ヤンバルクイナ保護の先駆的地域として名を馳せる。そこには、ヤンバルクイナが存在が、長く停滞する集落の起爆剤になることへの強い期待があった。国内では実に 94 年ぶりの鳥類の新種発見という話題性、黒褐色の身軀を彩る深紅のくちばしと脚部、胸部から腹部までを覆う黒白の横縞という鮮やかな外見、そして何より、鳥なのにほとんど飛翔することが出来ないという特異な生態を持つその鳥は、多くの人びとの興

味関心をかき立てる存在だったからである。しかし、そのことが集落内に戸惑いを呼んだ。

浮かび上がってきたのは、希少種をめぐるコンテキストの不在、という問題である。もともと「アガチ」という名でヤンバルクイナが存在を知っていた集落の一部の人びとにとって、「希少種保護」という流れには違和感があった。一方で深山部を棲息域とした「アガチ」は人びとのなかにそれほど深く根付いた存在ではなく、それを語る言葉も豊穡なものではなかった。外部からの衝撃を受けとめ、接続する、自分たちのコンテキストがないために、違和感やコンフリクトはただの「不満」となって地域のなかに沈殿していく。希少種保護をめぐる安田の戸惑いの背景には、外部からの価値付けを自分たちの文脈で読み替えることができないという、いわばローカルなコンテキストの不在という問題がある、と論じた。また、コンフリクトをさらに複雑化させている要因として、前章でみたように、ローカルなコンテキストがあるのにそれが聞かれない、という山の問題、そして、地域の停滞という重い課題のなかで、「希少種」しか資源として成立し得ないだろうという強固な空間認識の存在があることも指摘した。

では、そうした強固な空間認識はどのように打破していけるのだろうか。第5章と第6章は、うるま市浜比嘉島を事例地として、養殖への専門化によってシンプリフィケーションされていく海と地域住民との関係について論じた。第5章では、ある古老漁師Sさんが記憶する海の微少地名を記述・描写することで、シンプリフィケーションされる以前の海と人の関係がどのようなものであったのか、その詳細を明らかにした。微小地名が描く地図は、通常私たちは目にすることはない。地名の多くは公的な名称ではなく、その資源空間を利用するコミュニティの中で継承されてきたからである。地名のなかには、ある個人だけが名づけ、利用しているものさえある。それらは普段は彼らの頭の中にしまわれており、外部に表出する機会は限られている。直接的・間接的経験のなかから想起され、市販の地図や海図には記憶されないこれら名づけの地図は、いわゆる認知地図と言ってよい。

Sさんの地図を引き出すために用いたのは、スケッチマップと呼ばれる手法である。ただし、Sさんが高齢のため、筆者が彼の指示のもとにスケッチを行った。並んで、微小地名の意味を書き取り、リスト化した。位置と意味が明らかになった微小地名の数は約80である。幾多の微小地名からなる海の地図は、地形、生態、歴史、社会、そして個人の記憶が重層的に折り重なった、資源空間の来歴を描き出すこととなった。また、その資源空間がいかに豊潤であったかも描き出した。一方で、地図を作成する作業には多くの困難が伴った。Sさんたち漁民の空間認知の方法は、身体性に根付いた「順路型」を中心に組み立てられていたからである。筆者にはその身体性が欠けていたために、「順路型」の指示をすぐには理解できないことが多々あった。地図作成の困難を併せ記述することで、海の地図を受け継ぐには空間の身体性が必要なことを指摘した。

第6章は、そうした微細な知識と経験から構成される資源空間が、どのようにしてモズク養殖の専門化へと進んでいったかを、施政権返還を挟んで起こった大規模な海の埋立（CTS 開発）やゴルフ場開発への抵抗や順応と絡めながら記述した。浜の漁民たちも参加した CTS 開発への抵抗運動は、県内外を巻き込んだ住民運動（「金武湾闘争」）として知られている。金武湾闘争が掲げた「海と大地と共同の力で生存権を闘いとうろう」というスローガンは、県内外の多くの人びとを惹きつけ、支援の輪を拡げていった。金武湾闘争の思想はその後の沖縄の住民運動へと引き継がれていったとされている。

しかし、浜の漁師たちにとっての問題はまさに目の前の海そのものであり、その意味で、他の場所に代替可能性はなかった。彼らは裁判闘争の敗訴という結果に終わった金武湾闘争への自らのかわり、「新たな埋立を防ぎ今日のモズク養殖への道を開いた」と評価するが、どのように抵抗したにせよ、開発が現実のものとなった以上は、彼らは変容した海を受け止め、その変容に順応していかざるを得ない。開発の現実、資源の減少、気候の変動、そして市場の変化といった資源空間の変容をもたらす重層的要因のなかでの選択として、浜比嘉はモズク養殖への専門化（モノカルチャー化）を進めていくこととなった。今日ではその成功によって、浜は多くの若い漁師で賑わう。

そのような変化のなかで、資源空間の認知も大きく変わった。若手漁師の協力を得て作成した微小地名図からは、微小地名の減少が顕著であることが明らかになった。このことは、モノカルチャー化に伴って空間のシンプリフィケーションが進んでいることを意味している。一方で、彼らはハーリー（爬龍船競争）という装置をうまく使い、ゆるやかな集団性を保持することで、モノカルチャー化がもたらす種々のリスクを共同で回避していることも明らかになった。そのようなまとまりを生み出すことが、海の汚染や資源の減少といった〈生〉の余地を削るような空間の変容に対する彼らの抵抗であり、また順応である、と論じた。6章の最後では、Sさんの微小地名図をめぐるある親子の対話を取り上げ、「モズクしかない」という空間認識から抜け出していく若い漁師の様子を通して、「空間の潜在可能性」を見出すこととその重要性、そのための基本事項としての「聞く」ことの重要性について議論した。

第7章では、これまでの議論を総括した上で、「空間の潜在可能性」と「聞く」ことの意義について改めて議論した。各章を通して見たように、社会がどのように変容するか、その変容に伴って何が資源として求められるか、という点はまったく不確定であり、予測不能でもある。安田の事例も、浜比嘉の事例も、そうした予測のつかない資源空間の変容のなかで、人びとがどのように自らの〈生〉を切り開いてきたか、あるいは立ち止まってきたかを考えてきたものだった。山稼ぎからクイナへの移行、モズクの隆盛などは彼ら自身にとっても予期せぬことだった。そうしたなか、古宇利の事例のように、互いの〈生〉の

差異を承認した上で、空間の変容を受けとめながら資源との関係を保とうとする人びとの姿も見えてきた。しかし、じつは彼らも、近年は、種々の環境要因が複合的に影響し合い、海の生態系が回復しないという、資源との交渉を不可能にするような空間の変容に直面している。

資源空間は常に変容しており、人びとは抵抗と順応とを繰り返しながら、不確実な未来を切り開いていく。そうしたとき、具現化されなかった生態系のポテンシャルを掴んでおく、それを手放さないでおくことで、別の未来への可能性を開いておくことが肝要となる。なぜなら、その可能性の縮減は、彼ら自身の〈生〉の持続性をも脅かすことにつながる上に、その豊穡さは、彼ら自身が主体的に自らの〈生〉のあり方を選択することにもつながるからである。こうした議論から、各章で見てきたような資源の不確実性、生態系の不確実性、社会の不確実性のなかで、人びとがある空間で〈生〉を営み続けるためには、空間の潜在可能性をいかに保持するかという視点が重要である、と論じた。これが複数の地域、複数の時代、複数の変容を扱った本論の結論となる。最後に、Sさんの地図をめぐる親子の対話や聞かれない山の話などを通じ、空間の潜在可能性を見出す力は「聞く」ことを通じて醸成される、という点に触れ、序論で展開した複数性の議論と絡めた議論を行った上で、環境社会学の中心的な調査手法である「聞く」ことについての実践と考察を深めていくことを今後の課題とした。